

# I. 米国人のジレンマ

## —七年ぶりに見たアメリカの表情—

山 口 光 朔

東京からハワイに着いてきつそくおどろかされたのは、新聞紙に出ているいわゆる「反共学校」の大広告であった。かねがねうわさには聞いていたが、いよいよこれが米大陸からハワイにまで出張してきている。しかもその広告たるや、全ページ大のものである。これにはおどろかざるを得なかった。

### 右翼の台頭

さらに新聞紙上でよく見かけるのは、かの「ジョン・バーチ・ソサエティ」の名である。もちろんこの極右団体はけつしてよい意味で名が出ているのではないが、それにしても共和党系の人々がケネディ政権の幹部を非難するのに用いているのは、いささかおそれいった。いうまでもなく「反共学校」は、オーストラリア出身のシュワルツなる牧師がやっているもので、聴講料二五ドルとやらを徴集して、キリスト教的立場を売りものにして反共教育をほどこす巡回学校である。また「ジョン・バーチ・ソサエティ」は、本部がマサチューセッツ州バーモントにある秘密団体で、共産主義に反対すると共にケネディ

政権のニューフロンティア政策を左翼偏向であると嫌悪している。さらにこれはシカゴでお目にかかったのだが、米国内ナチス党のような極右勢力がかなり暗躍している。

これらの傾向は、かなり顕著だ。とはいえこういう極右勢力が現在の米国の政治に大きな影響を与えているというふうには断定するのは早計であろう。かのマッカーシー旋風の時代にくらべてみれば、現在の米国人の考え方は、一部の者をのぞいて比較的冷静だといつても過言ではなからう。これが七年目に米国を訪れてみたわたしの第一印象だった。

だが、このわたしの第一印象は正しいかどうか。わたしは、米国人の考え方は一部をのぞいて比較的冷静だといつた。とはいえ、一般人の脳裏に共産主義を敵視する考え方が強くこびりついていることは厳然たる事実である。ではなぜ冷静か、冷静ならざるをえないかという点、それは宇宙競争の面におけるソ連にたいするコンプレックスのせいであろう。すくなくとも人間衛星船の打ち上げでソ連に先を越されたということにたいする劣等感はきわめて深刻であつ

た。このことは、去る二月二〇日のグレン中佐の成功に米国民がこぞって狂喜したことでも明らかだ。

### 米ソの宇宙競争

ちょうどその当日の朝に、たまたまわたしは午前九時にロサンゼルスを出発してジェット旅客機でサンフランシスコに向かったのだが、宿泊先の友人夫婦は朝早くから起きてケープカナベラルからの打ち上げの実況放送を熱心に見まもっていた。この傾向は全国的で、ニューヨークではグラント・セントラル駅の特設大テレビの前に約五千人もの群集が集まって打ち上げ状況を見ていたというし、ロサンゼルスでもおかげでちょうど通勤時間のラッシュにもかかわらず、空港まではかなり自動車の交通が空いていた。みなテレビに釘づけになっていたのである。

その後数日間というものは、どこへいってもこの話題でもちきりだった。だが知識人の一部は、こういう企てにたいして批判的であった。事実、確かに米国は人間衛星船の地球三周に成功したとはいっても、衛星船の規模はソ連のボストーク一号、二号の約四・七トンに比べてその五分の一程の約一トンという小さなものにすぎない。しかもチフト少佐は一七周、すなわち二五時間一八分も飛びつづけている。この差は冷静に考えてみればきわめて大きなもので、とうてい早急に縮められるようなものではない。その上に、米国の人間衛星船の打ち上げに先だって、ソ連当局は数十トンの推進ロケット宇宙船計画を発表している。これは月ロケット成功などから考えると、けつして架空の計画ではなさそうだ。

こういった批判はさておくとしても、わたしがカナダのバンクーバーへ行くさいにシアトルの鉄道の駅で知り合ったペンキ工の老人の批判はもっと鋭い

なものだった。人間衛星船の打ち上げに浪費している大金をなぜ社会福祉や教育のために用いようとならないんだというわけだ。わたしはこの意見に大いに共鳴した。宇宙開発が云々されている時代に、日本では何年か時代遅れしたジェット機の製造に巨額の金を投じているが、この金を教育施設の拡張や住宅難の解消にふりむければ、どれほど国民が助かることか。今回の米国の衛星船打ち上げの成功に対して、たとえその公開主義的なやり方に好感をもつとしても、いぜんとしてなにかすつきりしないものが米国民の心のなかにあることはたしかだ。このことは北大西洋条約機構（NATO）諸国にたいして、ロストウ国務省政策企画局長らをパリに派遣して対キューバ経済制裁に加わるように要請しようとするような動きにもあてはまる。

### キューバにたいする見方

一般人のキューバにたいする見方は、キューバが共産主義化することには反感をいだいているが、社会主義化するかぎりでは、同国の存在が米国にとつての大きな脅威だとは、けつして考えてはいない。そして昨年のキューバ反革命にたいして米国が支援したということも、成功すればよかったのであって、失敗したからいけなかったとはいえ、あれはけつしてケネディの責任ではなくて、共和党の政策の延長にすぎないと割り切っている、こういう考え方は、キューバとの断交のおかげでうまいキューバ製の薬巻が手に入らなくなつて残念だというシガー党の連中の声に象徴されているようだ。

もちろん、こういう考え方はけつして健全な考え方とはいえない。なぜなら、その背後には中南米諸国の現状維持、すなわちそれらの諸国がいぜんとし

て米国の植民地ないし半植民地的な地位にあることを希望するムードが存在しているからである。こういう点で、中南米諸国にはまだまだ第二のキューバ化する国が出現する可能性が濃厚だという声がかかる。とくに人々の口にはのぼるのはアルゼンチンとブラジルである。現在の両国における政情不安定とインフレは、必ず革命を招くだろうというわけだ。ではいったいなぜ米国人は冷静ならざるをえないのか。それは、端的にいえば現在の米国が内外ともに直面している難問題をたくみに解決するむずかしさに由来しているといえるのではなからうか。そのむずかしさを知りはじめたということは、過去数年間における米国人の偉大なる進歩といえよう。とはいえ、その根底に存するのは、やはりソ連にたいする劣等感であるらしい。これがそが、米国人をして比較的冷静たらしめている根本的な原因だといえよう。一見したところ現在の米国人はかつてのような極端な対共産主義恐怖症（たとえばマッカーシー旋風）を克服して常識的に思考するようになったという感がつよい。たしかに非常識的なのはごく一部の極端な分子であつて、一般人の人々はこれらの連中にきわめて批判的である。

### ケネディの人気

事実、現在の米国が内外で直面しているジレンマを早急に解決することはきわめて至難だ。その点で一般国民の目はケネディ大統領の一手一投足に集まっているといつても過言ではあるまい。幸いにもケネディはハーバード大とマサチューセツ工大を中心とした米国一流の有識者をブレイン・トラストにもっている。そしてその政策は、人間衛星船の打ち

上げ成功もふくめて（昨年春のキューバ反攻は例外

としよう）きわめて有効適切であり、国威の回復に大いに貢献していると一般人は信じている。したがって、ケネディの人気はいぜん持続している。とりわけかれがカトリック教徒でありながら、さいきんカトリック教会側の圧力に屈せずにあくまで政治と宗教の分離という原則にもとづいて、教会立その他の私立学校への補助金交付案を拒否したことは賢明だったといえよう。これで、従来信仰的な立場からケネディに好感をよせなかつた多くのプロテスタントの信頼をかちえたからである。この調子で行けば、おそらくかれは米国史上でもっとも人気ある大統領になるかもしれない。

去る三月二日にケネディが米国の核実験再開を声明したさいにも、米国民の大半はそれをソ連との対抗上やむをえぬ措置として受け入れた。さらに昨朝の諸新聞はいっせいに日本を例外とする西側諸国の大半が、その措置に賛同している旨を大々的に報じて、ケネディの政策を支持するポーズをとつた。米国の核実験再開はソ連にたいする譲歩が最大限に達している現在やむをえない措置だといわけだ。とはいえ、このケネディの声明をわたしといつしよにテレビで聞いた米国の友人達はきわめて複雑な表情をした。それは、わたしが原爆被災第一号の国である日本からの訪問客であり、しかもわたしが核実験に反対であることを知っているからであろうか。それとも、それはかれらのベツトたるべきケネディが人類破滅という最悪の状態をもたらす悪魔の使者だと考えたからであろうか。とにかくかれらが複雑な表情を見せたことそれ自体は、率直にかれの良識のあらわれと見なしてよからう。

### 核実験反対デモ

はたせるかなその声明が発せられた翌日、すなわち三月三日（土）には全米各地で核実験反対のデモンストレーションが行なわれた。当時わたしはシカゴにいたが、同地では午後二時より市庁をとりまいてデモが行なわれ、有名な社会主義者であり平和主義者であるノーマン・トーマスが一行に鞭をとばした。もちろん、デモの参加者はシカゴ大学の学生を中心とした二百名足らずの小数ではあったが、翌朝の新聞をかざるに十分なニュースであったことをつたえておこう。米国にも良心のともしびれはまだ消えずとの感が強かった。さらに印象的であったのは、東京におけるデモでの学生と警官の衝突の写真とニューヨークにおけるデモでの学生と警官の衝突の写真が同じページにかかげられていたことである。だが、一般人はほとんどそれに無関心だったといったほうが正直であろう。

そこで結論的には、まだまだ本当の意味では米国人の考え方は健全だとはいかぬるのではなからうか。なるほど一部には、きわめて良識のある人々がいる。だが全体的には、米国人は、あまりにも自国の国家的利益ないし威信というものに重点をおいて世界情勢をとらえすぎる。そしてその結果、対ソ的な自信の喪失（多少はグレン中佐の成功で自信をとりもどしたが）というジレンマにおちいって、結局は比較的冷静なポーズをとらざるをえなくなっているのが真相であろう。逆にいえば、難問題の解決のむずかしさを知るがゆえに、あえて政治的解決をかれらの「有能なる」ケネディ閣下にかまかせきりして、自分は政治的に無関心たることをよそおっている。この方が一市民としてはよほど無難である。極端な分子から生まれるおそれもない。米国のいわゆる「善良な市民」とは、こういう人々のことを

いうのではなからうか。わたしとしては、米国人が一日もはやくこのポーズをかなぐりすてて、真に平和愛好者たるにふさわしい積極的な意見を開陳し

## Ⅱ 新しいフランスの胎動

### —知識人のアルジェリア独立によせる情熱—

この七月一日には、いよいよアルジェリア独立の国民投票が行なわれる（「付記」七月三日にアルジェリアの独立が正式に認められた）。かつてのプラスチック爆弾さわぎや、ひんぱんにつづいたドゴール暗殺未遂事件などはどこ吹く風かといった調子で、夜のバリはいつもながらにぎやかだ。

だが、一九五五年の夏に一カ月ほど当地に滞在したことのあるわたしには、こんどのパリ訪問はあまり楽しくはなかった。その最大の理由は、愛用のカメラ（ニコンF）を盗まれたからだ。

#### 喪失した文化の創造力

カメラのことはさておくとしても、当地で感じたことは、「文化」というものが「歓楽」によってすり代えられてしまったかのような気がしたことだ。かのドゴール將軍の出馬以来、フランスは第四共和制という看板を新たに第五共和制にかえはしたものの、文化的にはフランスはもはやまったく新しい文化を創造する力を喪失したのではなからうか。そういう感じをうけたことが、楽しくなかった第二の理由だ。これは、わたしの期待が大きすぎたためであ

て、米国をして世界の一大平和勢力たらしめるように希望してやまない。（一九六二・三・三）

（米国ミシガン州アナーバーにて）

るかもしれない。とにかく、モンマルトルの丘や、リュ・ド・セーヌ街などに数多い画廊を見てまわっても、これこそは新しいフランス文化の誕生だと思わせるような作品には、ついぞお目にかからなかった。

しかしながら、それだけでフランスに新しさを求められぬと断定しきることは、いささか早計であるようだ。たしかに文化的にはあまり新しさを求められそうにない。それは、パリ自体がいぜんとして古い建築美を誇り、アメリカのように新しい建築美の出現を期待できそうもないのと同じだ。この点は、イギリスともひじょうにちがう。たとえばロンドンでは、戦後ロンドン大学の高層建築が完成したのを皮切りに、いまでは近代的な高層建築が続々と建てられているからだ。ところがパリには、近代的な高層建築が皆無である（もつとも、戦禍をまぬかれた点でちがうからむりもないが）。

#### 知識層とアルジェリア独立

ではいったいどこに新しさを求めるかというところ、それはやはりサルトルたちを中心とする若い知識層